

大館市にある専門職養成機関 市病付属高等看護学院を訪ねて



市の産業、文化の振興と活力となる人材の養成、教育環境の整備充実を図るために、高等教育機関の誘致がさげばれて久しくなります。そこで市内にある専門職養成機関「大館市立総合病院付属高等看護学院」を訪ねてみました。

学院祭のさなかに

市立総合病院付属高等看護学院は、ちょうど学院祭にあたり、人の出入りの多いときでした。展示会場には、標本コーナーやさまざまな手当、やけど・日射病・食中毒の処置についてわかりやすく書かれており、学生たちの日ごろの研んをうかがわせる中に、エアロビクスの会場もあり、現代女性の一つの側面を感じました。

人間教育

プラス専門教育

教務主任の越前屋さんから学院教育の概略を伺いました。「以前は、高校普通科出身者を三年間で養成しましたが、現在は准看護婦(士)の資格のある人を二年で正看護婦(士)へ養成する機関です。カリキュラムは、基礎学科として、物理学、生物学、心理学、教育学、外国語などがあり、看護婦(士)である前に、豊かな感性にうらうちされた人生観をもつよう養成しています。専門学科としては看護学(概論、成人、小児、母性)を中心に多くの科目を学びます。」

学院は、二十二人と規模は小さく人数は少ないが完全な高等教育機関の姿があります。

感動する心

次に最終学年の具森靖子さんと樋渡規恵子さん(ともに大館一中・柱高校出身)から会場に設けら

れた喫茶コーナーで話を聞きました。「看護婦として最も大切なことは、思いやりと共感です」ときっぱり。さすが目的意識をはっきりもった人たちで、いまの新人類とは違ったものを感じました。

「産婦人科の夜勤で、出産に立ちあつたときのこと、苦しむ母親の足をさすり、励げます中で新しい生命が誕生した感激は忘れることはできません。助産婦さんのてきぱきとした一つ一つの処置、わが子のために苦しむ母の姿、そして尊い生命の誕生―身の引き締まるような感動の連続でした」と話していました。この体験は彼女たちにとってこれから大きな指針となることでしょう。

「介護は一つの人生経験ですが、看護は科学的、専門的に裏づけられたものだと思います」言葉の端々に、旺盛なプロ意識とともに、キラリと光るものを感じました。

神に誓い

われに誓う

廊下に張ってあったナイチンゲール誓詞に

「われはここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん
わが生涯を清く過ごし、わが任務を忠実につくさんことを
われは心より医師を助け、わが手に託されたる人々の幸のため
に、身を捧げん」

市立総合病院の外來で、病棟で身を粉にして働く看護婦さんの六割はこの学院の出身者ということでした。お医者さんと看護婦さん

のチームワークはよく、県北部の医療センター「市立総合病院」を支える大きな力となっています。

市内唯一の

高等教育機関

いま若者たちの県外流出が続く大きな問題になっていますが、看護婦にも、これが見受けられます。専門職として、この学院を巣立つ若い看護婦が他県へ出ていくことに、大館の現状が感じられます。一人でも多く市内に就職してもらいたいものです。

行政は、市内唯一の高等教育機関である学院の、今後に心していただきたいと思っています。

また、ほかの高等教育機関や各種専門学校を早期に誘致することも望みます。それにこれら高等教育機関等を卒業した若い人たちの働く場を地元で確保するため、企業誘致も積極的に進めていただき

たいと思います。

看護観

当学院の卒業論文集を読ませていただきましたが、彼女たちの心を知る一助として、二、三のしるします。

「知識、技術の向上が患者の身体的苦痛の軽減につながるが、常に患者の精神的苦痛の緩和に努めることも看護婦の役割である」

「病気は、患者の身体の中からこわれた部分を取り除けば直るといふ簡単なものではない。心の援助を行う看護婦が必要である」

以上学生たちの看護観から、前向きな職業観がひしひしと感じられました。燃える思いの学院祭から、夢多き乙女たちの前途に、明日の社会への躍進を信じて、高等看護学院を後にしました。

広報市民レポーター 秦 震 (鉄砲場)



学院生の具森さんと樋渡さんを取材する秦レポーター

◆「広報市民レポーターだより」は、6人のレポーターが独自に取材した記事を掲載しています。